

『「資本」に対抗する民主主義』

—市場経済の制御と「アソシエーション」—

著・芦田文夫



本の泉社 3091円+税

本書は著者による、この20年間ほどの研究成果を整理し、まとめたものである。著者の芦田文夫氏は、社会主義経済論の専門家であるが、その研究範囲は広く、政治学や社会学、さらに哲学にまで及んでいる。その理由は氏の社会主義研究の問題意識の深さによる。

しかし本書を読むと、問題はそれほど簡単でないことが分かる。「ペレス・トロイカ」という言葉は誰でも知っているが、ソ連が市場経済に移行する過程でどのような問題が生じていたのか、またソ連体制崩壊後に、東欧の諸国で市場経済化と既存の社会主義的秩序との間でどのような相克があり、また各国がこれにどう対処して来たのか、という点についてはほとんど知られていない。評者もこの点の認識を全く欠いていたが、東欧各国の対応

には、3つのパターンがあるという。本書はその過程と問題を明らかにするのだが、そのことは逆に、われわれ資本主義体制の下で生きる者が、国家的、社会的制御を通して新たな社会主義像を描く上で、大変

参考になるものである。その際の著者の基本的視点は、人々の自律的協同すなわち「アソシエーション」を重視するところにある。国家と市場との間にある、アソシエーションのような市民社会の人的関係に焦点を当てて、経済学の範囲を超えたものであるが、この点は社会主義の総体的分析のためには欠かせない視点なのである。そのため筆者の論考は、人間の自由の問題にも及ぶことになる。

本書は400ppに及ぶ大著であるが、各章の冒頭には章の要約が書かれており、理解の足しになる。「あとがき」で著者も望んでいることであるが、本書が社会主義論の再生のための手がかりとなることを、最後に付け加えておきたい。

(碓井敏正・京都橋大学名誉教授)

新たな社会主義像を提示